

新聞記事を基にした模擬授業は若い教員に
「授業に大切なこと」を気づかせるために有効か
—小学校の教員を目指す学生による理科の授業案創りと授業展開—

Are the lessons with the articles of newspapers effective for
young teachers to learn what important things in teaching are?
—Planning and giving science lessons by the students in
the department of early childhood care and education—

津吹 卓

Takashi TSUBUKI

要 約

授業のポイントは、何を教材にしそれを用いて何をどう伝えるか、そしてその展開を教える相手に応じてどう変えるかである。しかし近年、教育現場でもマニュアルが大流行である。その打開策の1つとして、理科概説の授業の中で、小学校教員を目指す学生に新聞記事を活用した授業案の作成と模擬授業を班で行なわせた。テーマや内容は学生に任せ、授業展開プランについて必要に応じてアドバイスを行なった。

その結果、授業者と聴き手の立場の体験から、多くの学生によって次のことが大切であると指摘された。

- (1) 授業内容：①テーマと聴き手をいかに結びつけ、内容で惹きつけるか、②ポイントを絞るとともに、関連事項とどのようにつなげて展開するか、③内容と聴き手の生活とをどうつなげるか、④具体的なことをどう示すか。
- (2) プレゼンテーション：⑤導入で聴き手をいかに引き込むか、⑥分かりやすい表現とともに、図・表・写真・動画および身振り手振りをどう活用するか、⑦授業の中で聴き手とのコミュニケーションをどうとるか。

以上のことから、新聞記事を基に自分で授業を組み立てるトレーニングは、展開の善し悪しが自ずと分かり、若い教員を育てる方法の1つとして、極めて有効であると考えられる。

十文字学園女子大学人間生活学部児童幼児教育学科；十文字中学・高等学校

Department of Early Childhood Care and Education, Faculty of Human Life, Jumonji University; Jumonji Junior High school and Senior High school

キーワード：教員養成，授業論，新聞記事，教授設計，模擬授業，NIE

Summary

The important things in teaching for teachers are choosing suitable materials for lessons, what and how telling children and students, and changing how to teach according to them. But recently it is unfortunate that many teachers often follow the teaching "recipe" easily without their own thinking. It is very dangerous for teachers, in particular freshman or young teachers.

In the department of early childhood care and education, the author tried for students to plan and give science lessons with articles of newspaper one another group. Students chose articles according to their own ideas, planed and made original lessons with the author's hints. After lessons a great many students found out commonly the different elements between the good lessons and the bad ones by themselves.

Then teaching with newspapers(NIE) was very effective for freshman or young teachers to grow up to be good teachers.

はじめに

今の世の中を見るとマニュアルが大流行のように筆者は感じる。学校教育においてもマニュアル本があふれており、生徒用にも苦勞せず安易に目先の点数が取れる問題集と参考書しかないと言っても過言ではない。詳しすぎてザッと読んでもよく分からない良心的な参考書は敬遠されて売れないため、出版社も作らないのである(藤沢伸介, 2002)。そのような中で育った子ども(そして保護者、とくに母親)の意識を、どのように変えていけば良いのか。その役目を担っているのは、教育現場で指導する教員であろう。

教科書には指導書があり、自分の授業展開の参考資料として使えば役に立つ。ところがそれをマニュアルにしてしまうと、展開がパターン化される。「教科書で教える」(教科書を使って教える、筆者に言わせれば教科書も使ってとなる)のほすが、「教科書を教える」となってしまう。これでは誰が教えても、誰に教えても、“全く同じ授業”が展開されることになる。これでは教える児童や生徒に適した授業にならないのではないか。教員が違えば展開は異なって当然であり、同じ教員が教えてもクラスが違えば、また同じクラスでも生徒の状況が違えば、展開を変えてしかるべきであ

る。そのためには、教える生徒の状況をつかみ、生徒に適した教材を選び、生徒に適した授業展開をすることのできる“本物の教員”を育てるしかない。この本来の授業の発想を身に付ければ、教科だけでなく行事やクラブ活動、そして学級活動やLHR等はすべて本来の教育活動として展開できる。そして教員をしながら自らも成長し続けることができる。

ではそのために、具体的に何をしたらよいのだろうか。その方法の1つとして、筆者は新聞記事を学校教育の中で活用することを提案したい。いろいろな活用法があるが、筆者は生徒にとって身近で興味深い授業を創るために、授業の教材の1つとして活用している。

NIE (Newspaper In Education)¹⁾の良いところは、「マニュアルが無いこと」だと筆者は考えている。新聞記事を使うとは、①生徒に伝えたい視点・内容を考える、②生徒に適切な記事を探す、③教授者らしい記事の活用を考える、という視点から組み立てを行なうことであろう。①～③の順序はその時によって異なり、同時進行の場合も多い。すべて、そのときの自分の知識・理解・発想で創るしかない。その時その時で、正解が異なる

¹⁾教育活動で新聞を教材として活用すること。

と言った方が正確であろう。だからこそ、NIEには価値があると筆者は考えている。工夫して授業を創る中で教授者は鍛えられる。そして、良い授業であったかどうかは、教授者が授業を展開してみることで自ずと分かるものである。生徒の反応も判断材料の1つになる。新聞各社でもNIEセミナーが盛んに行なわれている。しかし下手をすると授業の展開例のマニュアルは作られるものの、授業者がどのような発想で授業をどう展開したのかについての議論にまで深めるのはなかなか難しいようである。しかし、新聞記事はあくまで授業の素材に過ぎず、授業展開の発想と内容は各教授者の授業に対する考え方に基づくのである。

NIEを通じて若い先生方を育てた経験もあり(生物科, 2001; 津吹他2002), 教員の新人研修の中に、「NIEを基にした授業案²⁾創り」を設定すると良いのではないかと筆者はずっと考えてきた(津吹, 2006)。もちろん、NIEだけにこだわる必要は全くない。しかし、教員にも生徒にも身近で手軽な材料として、新聞を使わない手は無いのではないか。

そこで、平成21年度に本学の児童教育専攻2年の学生に、班で新聞記事を使って理科の授業案を考えさせ、一緒に受講している他の学生を対象にした模擬授業を試みた。

この報告では、学生が新聞記事を用いて準備・展開した模擬授業を通して、教授者として何を学んだのか、また聴き手として何に気づいたのかを述べ、それに基づきNIEの効果について論じた。

なお、この内容は、2010年3月に奈良女子大付属中等教育学校で開催された、全国高等学校NIE研究会第8回研究発表全国大会において、「大学における授業」の部門で概略を発表した。

1. 対象の学生の状態

²⁾学習指導案とも言うが、ここではとくに展開の内容に重きを置きたい。

十文字学園女子大学人間生活学部児童幼児教育学科児童教育専攻の2年生54名を対象にして、「理科概説」の授業の中で新聞記事を使った理科の授業案を創らせ、班で互いに模擬授業を展開した。授業は、受講者を4月に編成した5~8人の班で行なった。

学生の中には、精神年齢が高校生とあまり違わないと思われる者もあり、指示に従うことに慣れていて、しかし、受講者は本気で教員になりたいと思っていた学生ばかりであった。そして、これまでの授業でも私は方向性を指示するだけであったので、自分で考えて動かないと授業にならないことを学生はよく分かっていた。キャンパスで行なった初めての春の自然観察でも、観察のねらいは説明するものの具体的に何をどう観察するかは学生に任せ、その上でのアドバイスを行なった。そして、各班から受講者全員に対して観察結果を報告させ、質疑応答も行なってきた。授業案創りでも学生たちはこれらの体験を生かし、何をどうすれば自分らしく展開することができるのかを理解すると、非常に積極的に取り組もうと活動を始めたのであった。なお、受講者の中には、大学入学までに新聞記事を使用した発表を体験した学生はいなかった。

2. 授業案創りと授業の準備

学生たちにはこの授業の始まった4月初めに前もって「新聞記事を活用した授業」を行なうことを予告し、新聞記事を集めておくよう指示しておいた。児童教育専攻は実習や授業の準備で忙しく、学生が自分たちで集まって話し合う時間が取りにくい状況であった。そのため、授業の1コマ半(140分)の時間を準備の時間に充当した。初めに「授業案創りのために」(表1)を全員に配布して説明した。学生たちは自分たちが持ってきたすべての新聞記事を確認しながら話し合い、授業のテーマを決定すると具体的な授業展開を組み立てていっ

表1. 授業案を創るための注意事項

(1)記事を基に「聞く人に何を伝えたいのか」を
しっかり考える

授業の目的の確認→これが決まっていないと、
聞く人には何も伝わらない

(2)「聞く人にどのように伝えたいのか」

聞く人が分かるために、話の流れ（内容・順
序・時間配分等）をどのように組み立てたら良
いのか

(3)「聞く人の立場に立って（レベル・予備知識
の予想）何をどう補ったら良いのか」

記事の内容だけをただ伝えるのではない。伝
えたい内容を記事を使いながら伝えるのが授業
（自己主張・自己表現）である。同じ記事を使っ
ても人により伝えたいことや伝え方は異なるは
ずである（自分らしさ）。自分が伝えるために、
記事の内容を補い深めるのに必要な書籍や資料
等は？

(4)レジメのポイント

1. テーマ；2. 班名および班員名；3. 何を伝え
たいのか（訴えたいこと・分かって欲しいこと）；
4. あらすじ；話の流れ；組み立て；5. 分かって
もらうために、必要に応じて写真・図・グラフ・
表など；6. 使用した新聞名（年月日）および使
用した資料、書籍（著者名、発行年、出版社）

表2. 各班の模擬授業のテーマ

1 班：地球温暖化について

2 班：ホテルから分かる環境破壊

3 班：若田さんと宇宙

4 班：レーザー治療と目について

5 班：豚インフルエンザについて

6 班：卵の不思議

7 班：異常気象

8 班：水質汚濁について

た。筆者は各班の様子を観察しながらアドバイ
スを与え、質問を受け、相談に乗った。「授業の組
み立て方」を始めに聞いても、なかなか実際の場
面で用いることは難しい。そこでさらに、新聞記
事がいくつもあれば使えば良いし、また新聞記事
だけでは狭すぎて授業をするには不十分なため、
内容を深めるために必要な知識等を他のものから
も入手するように指示した。また、聞き手に何を
伝えたいのが明確でないと授業にならないこと
も再確認した。

模擬授業のテーマを考えるに当たっては、新聞
記事をただ使うのではなくあくまで「理科の観点
からの授業」を設計するよう求めた。中には「地
球温暖化」のテーマでCO₂削減から無意識のう
ちに経済の話に結びつけようとした班もあり、改
めて理科の授業であることを伝えた。このことで、
1つの記事から授業を多方面に展開できることを
学生は学んだようであった。模擬授業の準備をす
る最初の段階で、各班のテーマ（表2）はひとま
ず決まった。それでも具体的なイメージがわかず、
何をどのように展開したら良いのか悩む班がいく
つもあった。そこで再び、何を伝えたいのか、内
容を何に絞ったら良いのか、例えば4班のレーザー
治療だったら、眼の話だから、眼の構造は必要で
はないか、6班のニワトリの卵の殻の色なら餌と
の関係（フラミンゴの例を出して）等、授業をしや
すいように組み立ての具体的なアドバイスをした。
学生たちはさらに授業時間外に、テーマに基づき
調べ話し合い、自分たちなりの授業案を完成させ、
模擬授業で全員に配布するレジメを作成した。

3. 模擬授業の展開

展開に授業2回分（180分）を用いた。時間の
関係で模擬授業は1班20分とし、経過時間を15分
と20分で鈴を用いて知らせた。しかし実際にやっ
てみると、時間内に終わることはなかなか難しく、
最後の班は短時間になってしまった。8つの班の
模擬授業の展開の様子は下記の通りであった。

1班：地球温暖化について

新聞記事はかなりたくさん使用した。しかし話題が多すぎてポイントが絞れておらず、資料をすべて出してしまった。また単なる発表であり、授業らしい組み立てではなかった。自分たちで創った資料もあったが、投影した画面が小さすぎて見にくかった。班員の話では、準備の時間が不十分でポイントを絞れず、すべてを言うことになったようだ。また、原稿をただ読んでいる学生もおり、自分自身が理解し消化するまでには至っていないかった。

2班：ホテルから分かる環境破壊

1班が温暖化だったため、内容はうまく関連した展開になった。クイズ形式でいくつかの質問を導入にしたため、うまく聞き手を引き込むことができた。導入でホテルの知識を伝えるとともに、ホテルに何が起きており、それがどういう問題を引き起こしているかに発展させていた。レジメに新聞記事自体を入れることで、視覚的にもポイントをはっきり示したため、聞き手はとらえやすかった。

3班：若田さんと宇宙

若田光一の紹介から始まり、住所が埼玉県、そして浦和高校出身ということで、聞き手にとって身近な人だと感じさせた。宇宙での生活を分かりやすく説明し、とくに尿の問題をアピールして興味を誘った。また「空飛ぶ絨毯」や「腕相撲」と題した無重力での動きの動画が非常に分かりやすく、学生は興味を持って見ていた。ただ、展開はうまくいったが、事実は分かっても教授者としてこの記事で果たして何を伝えたかったのか不明瞭であるように筆者には思われた。

4班：レーザー治療と目について

引用したのは医療関係の記事で、加齢性黄斑変性をレーザーで治療するというもの。開始早々いきなり人数を出して何の数かを問うたが、それはクラスで眼鏡をかけている人数であった。さらにコンタクトの使用者に挙手をさせ、目の悪い人がいかに多いかを身近に感じさせた。問題のない人は6人に1人であった。これで聞き手は眼の世界

に引き込まれた。眼の構造と働きを分かりやすく図で説明し、近視や遠視の理由も述べ、さらに加齢性黄斑変性と白内障・緑内障の紹介、そして白内障の治療方法を述べた上でレーザーの活用を説明した。本来授業に使うべき記事ではなかったが、うまく展開して聞き手を引き込んだのは見事であった。

5班：豚インフルエンザについて

新型インフルエンザが流行し始めたところだったため、話題性としては最適なテーマであった。当然新聞にも多くの記事が載っており、どのように組み立てるかがポイントであった。展開は、インフルエンザの症状や普通の風邪との違いから入り、新型インフルエンザの特徴と旧型との違いについて述べ、最後に予防法で締めくくっていた(資料1)。最新情報と予防法を中心に絞ってあるために聴きやすく、展開もうまく関連づけられていて分かりやすかった。また、新聞記事の内容をそのまま伝えるのではなく、新型インフルエンザウィルスがいかにして生じてきたのかを、記事を基に分かりやすく図を作成しての説明だったので(資料2)、聞き手も惹きつけられた。

6班：卵の不思議

ニワトリの卵について、先ず殻が白色の卵と赤味があった卵を示し、栄養価に違いがあるのかどうかの質問を導入にしていた。学生たちには普段の生活で赤色の方が栄養価が高いという先入観があり、それを否定したために授業にグッと引き込まれていった。そして餌と色の関係は、殻の色は変わらないが黄身の色は変わるなどのニワトリの卵についての話の後、両生類や貝類の卵の話に発展させていた。最後にいろいろな卵の写真を見せ、何の卵かを当てさせるクイズになっていた。最後のクイズはオブションで、筆者はあまり意義を感じなかったが、学生たちは集中して考えていた。

7班：異常気象

導入で、良く聞く異常気象という言葉が過去30年の平均値からはずれた気象を指すものと聞いていて、学生たちは目から鱗の状態であった。人へ

の影響も何となく聞いていたことであったが、植物が適応できなくなると姿を消すとか、サクラを例に四季が変わる話、食物連鎖がうまく機能せず生態系のバランスが崩れる話、ホッキョクグマへの影響等、身近な話題をきちんと説明しているのが良かった。期せずして、2班の「ホテルから分かる環境破壊」の話とも関連し、理解が進んだように思われた。

8班：水質汚濁について

水の浄化装置、循環、水質汚濁による病気、そして最後にきれいな水を簡単に作る方法（ろ過装置）と展開する予定であった。しかし、それまでの班が時間を延長したために本来の時間が取れなくなった。

この班は時間が無かったために、メモを見ずに見事に内容を説明した。内容がしっかりと自分たちのものになっていたからできたのである。最後の「きれいな水の作り方」ではろ過装置の断面図を黒板に貼り、一定量の水を入れ水が増加する様子を、紙を徐々に貼って増やすことで示し、変化を言葉でなく視覚的に表す工夫がされていた。これを見て、学生たちも視覚的に理解しやすくする工夫は大事だと思ったようであった。

4. 学生の受け止め方

理科概説の授業では毎時間、その授業に対する意見や感想を学生全員に書かせていた。そして、意味のある質問や意見については、次の授業で答えたり説明をしたりして、学生とコミュニケーションをとることを心がけてきた。学生はかなり素直に本音を書いていた。

今回の模擬授業について、学生たちは自主的に、①各班の授業について感想、②自分たちの模擬授業の手応えと反省、を書いてきた。そこから模擬授業の受け止め方を探してみると、授業をした側と聞いた側の受け止め方が極めて近いことが分かった。筆者がとくに批評をしなくても、授業の善し悪しにかかわらず、授業をする体験と聞く体験を

通して、自分たちの行なった授業をかなり客観的にとらえていた。

典型的な2つの班について、準備の状態を述べてみたい。うまく授業が展開できなかった1班の「地球温暖化」では、「持ち時間に対して多くのことを盛り込みすぎたためにポイントが絞れずまとまりが付かなかった。時間的なゆとりも無かったために授業に必要な聞き手とのコミュニケーションもできないまま、ただ発表で終わってしまった。」という自らの反省、そして聞き手からも同様の批評があった。準備した新聞記事をすべて紹介したために大きな話題を入れすぎ、しかも関連をうまく付けられなかったために、個々の羅列になった感があった。説明も自分の分担しか分からず、反省を見ると自分の役割の部分をただ読んでいた学生もいたようであった。しかし一方で、「グラフや数値で事実を示したことにより、事実を具体的にとらえることができ、また地球温暖化からエコにまで発展し、自分の問題としてとらえることで自分ができることが明確になった」という聞き手からの評価もあった。

それに対して、1班同様やはり大きなテーマであった5班の「豚インフルエンザについて」がなぜうまく展開ができたのかを探ってみた。すると、新聞記事は多く集めていたものの、すべてを使うことはしていなかった。また、インターネットも含めて、新聞記事以外の資料をいくつも集め、参考資料として使用していたのである。そして前述の通り、読売新聞の記事を基に自分で図（資料2）も作成した（実は朝日新聞では、学生の作成した図とほぼ同じものを新聞に掲載していた）。そして何より、授業全体の流れや展開を創り、班の全員がそれを分かった上で、自分の分担を展開していたのである（資料3）。また自分の分担についても、自分なりのメモを作り内容を自分のものにしていくことが分かった（資料3）。自分たちなりの授業の組み立てを考えた上で、ここまで準備をしていたからこそ大きなテーマにもかかわ

らず、持ち時間をうまく活用して聴き手に分かる授業ができたのである。これが本来の授業案創りである。

学生たちの、自分たちの授業を行なったの手応えと、他の班の授業を受けての批評を以下にまとめてみた。内容については、①テーマと聴き手をいかに結びつけ、内容で惹きつけるか、②ポイントを絞るとともに、関連事項とどのようにつなげて展開するか、③内容と聴き手の生活とをどうつ

なげるか、④具体的なことをどう示すか、が大切であることを学生たちは指摘していた。そしてプレゼンテーションは、⑤とくに導入での示し方でいかに聴き手を引き込むか、⑥分かりやすい表現とともに、図・表・写真・動画および身振り手振りをどう活用するか、⑦授業の中で聴き手といかにコミュニケーションをとるか、にかかっているという意見であった。

資料1：「豚インフルエンザについて」のレジメ

理科概説

発表日 6月15日(月)

5班

豚インフルエンザについて

1. インフルエンザとは？

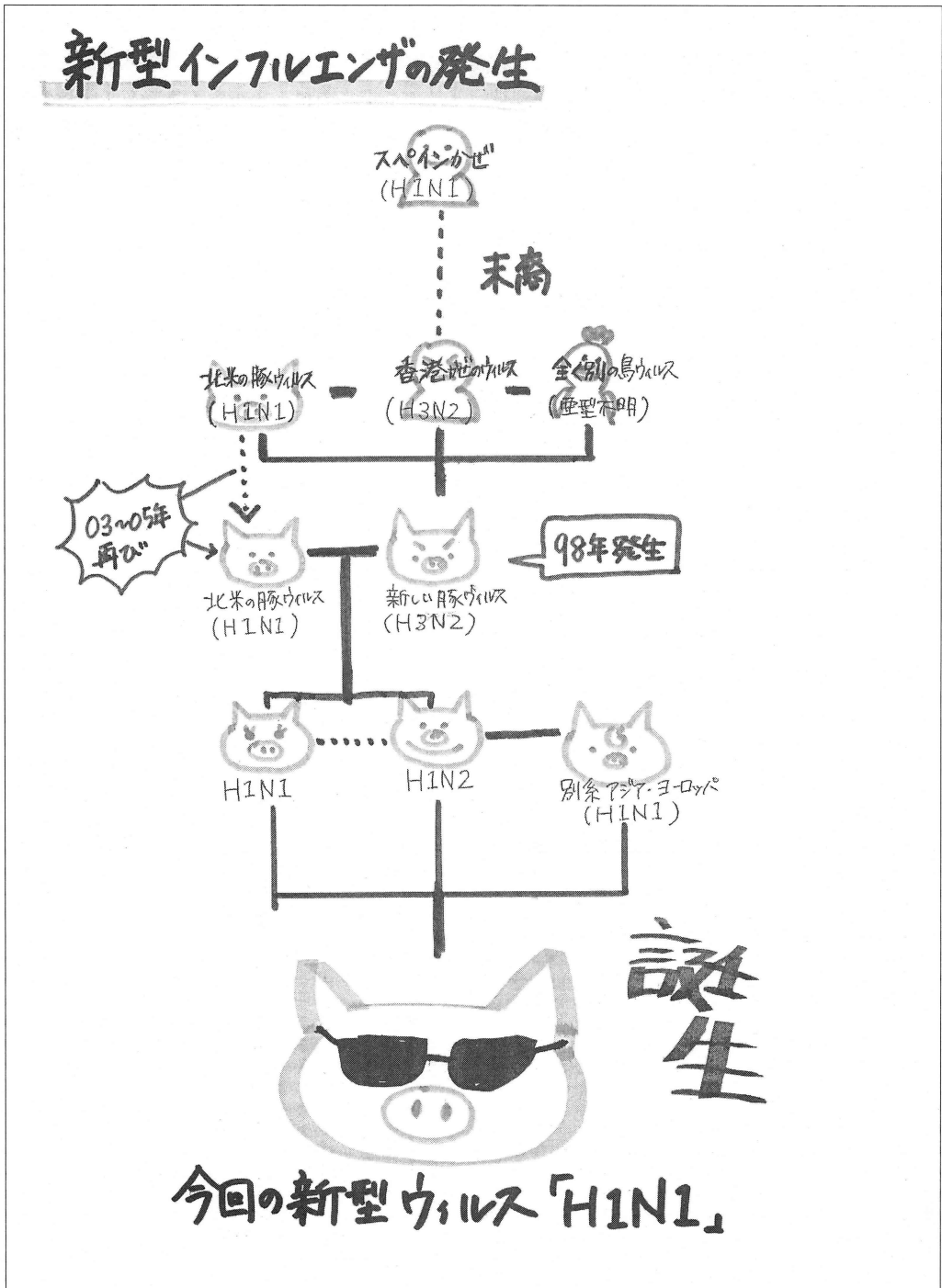
- ◆おもな症状
- ◆インフルエンザと風邪の違いについて
- ◆種類

2. 豚・鳥・人のインフルエンザの違い

- (1) 新型インフルエンザの発生
- (2) 致死率について
- (3) 毒性が強まる・・・？

3. ワクチンについて

資料 2 : 模擬授業のために新聞記事に基づいて作成した図



資料 3 : 授業展開のための覚え書き

(上 : 自分の分担を説明するためのまとめ 下 : 授業全体の展開の流れと役割分担)

インフルエンザって？

豚インフルエンザ
↓
発生 (どのようになっただか)

予想
鳥インフルエンザ → 豚インフルエンザ → 人インフルエンザ
違い.

豚 - 人 人
鳥 - 人 人

ワクチン

H5N1

鳥インフル

A型 ← ホンコン 型
B型
C型

国語読んだが
中心ととる。

空気
中に浮遊する
毒が増える?

毒性が弱まる。

菌の進化

栄養足りない。
メキシコ 死者多数。
↓ 毒がうつる？
日本 = 少数。

豚インフルエンザの本質..

- ・ レジキ いる
- ・ インフルエンザ (普通) はるか
- ・ 豚インフル 発生 へる
- ・ 鳥インフル・豚インフル・人インフルの違い。おけみ
- ・ 毒性が強まる理由 まいまい
- ・ ワクチン。しょうこ
- ・ 日本で死者がでなかった理由 タロス。

おわりに

各班がわずか1回だけの模擬授業ではあったが、新聞記事を基にしてすべてを自分たちで創り上げる体験から、学生たちは上記①～⑦のように、「授業展開に大切なことは何か」を自ら考え学んだように思う。この結果からも、授業の内容と展開を考え学ぶために、新聞記事は適切な教材の1つになると筆者は考える。どのような観点から記事を探し、それをどうとらえ、それをういて児童に何を伝えようとしているのか、この発想を身に付けた学生が増えるとともに、自分で授業を作り上げることのできる“本物の教員”が育ち、それぞれの学校で児童を育てていって欲しいと願う。

なお、この模擬授業を指導する中で気づいたことがあった。それは理科概説の中で行なった自然観察である。前述の通り、自然観察の目的は伝えたものの、具体的に何をどのように観察するかは学生に任せてスタートした。意識をしていなかったのだが、何をどう観察するかは、どのような記事を探してどう活用するかと同じなのである。

「新聞記事を使った授業」の展開ではあったが、その奥には「授業とは何か」、また「教育とは何か」、そして「子どもを育てるとは何か」がある。子どもは一人ひとり違う。多様な子どもたちに対して、教員はどのように一人ひとりに応じて、その良さを引き出し育て伸ばしていったらよいのか。そのために教員には、幅の広い適応力と受け入れる力量が要求される。マニュアルばかりに頼っていたら、子どもを自分のマニュアルに合わせて育てることになる。それでは本末転倒である。教員が無意識に「間違っただけ」を一生懸命教育した場合、子どもは教員の言うことに従ってしまうことも多い。これは怖いことである。まずは子ども（保護者）に応じた接点を作りながら、じっくりと本来の教育を行なうのが理想である。子どもは生き物である。生き物は変化し続けるものである。

いろいろな場面で子どもに適応しながら教育の

できる若い教員を育てる方法の1つとして、新聞記事を基に自分なりの授業を組み立てるトレーニングは極めて有効であると考えている。

引用文献

- 藤沢伸介, 2002. ごまかし勉強(上) 学力低下を助長するシステム. 161+(8)PP.; (下)ほんものの学力を求めて. 180+(7)PP. 新曜社.
- 生物科, 2001. 「激動する生命科学の現状」を新聞を使って授業の中で伝える試み(第2報). 十文字中・高紀要24: 41-48.
- 津吹卓, 2006. NIEによる生徒指導を通じて自ら行動できる教員の養成を. 全国高等学校NIE研究会第4回研究発表全国大会プログラム・発表要旨集: 36-39.
- 津吹卓, 2009a. 高3の生物受験者の授業の中で新聞を活用して何ができるのか---最新生物情報、進路情報、そして生きるとは---. 全国高等学校NIE研究会第7回研究発表全国大会プログラム・発表要旨集: 16-23.
- 津吹卓, 2009b. 高等学校におけるNIEをどうとらえるのか. 十文字中・高紀要31: 38-47.
- 津吹卓, 2010. NIEを活用した授業案創り~小学校の先生を目指す学生による理科の授業案創りと授業展開の試み. 全国高等学校NIE研究会第8回研究発表全国大会プログラム・発表要旨集: 16-19.
- 津吹卓・五百川麻子・奥山幸, 2002. NIEから授業論へ---「激動する生命科学の現状」を新聞を使って授業の中で伝える中で学んだこと. 全国高等学校NIE研究会第1回研究発表全国大会プログラム・発表要旨集: 60-63.